2012年
5月22日
火曜日

限定合理性下での「いい仕事」

小林伸生　教授（産業構造論）

最初にお聞きします。あなたは①今1万円を受け取るのと、②1年後に1万500円を受け取ること、どちらを選びますか。次に設定を少し変えて、①10年後に1万円を受け取るのと、②11年後に1万500円を受け取ること、どちらを選ぶでしょうか。挙手の状況をみると、最初の問いでは今1万円を受け取る方が圧倒的に多く、2番目の問いではほぼ半数ずつだったと思います。

これは「時間割引率」に関する問いです。具体的には、今もらえる金額と将来もらえる金額を比較して、将来どの程度多めにもらえるなら、同価値と考えるかということを示す割合です。今の1万円と1年後の1万500円が同価値であると考える人がいるならば、その人の時間割引率は年5%ということになります。

ところで今回の2つの問いかけは、共に時間割引率は年5%です。合理的な経済人を前提とすれば、同じ人はどのタイミングでも、同じ時間割引率で判断すると考えられます。つまり、全ての人は同じ方を選ぶはずです。しかし多くの場合、こうした質問をすると今回と同様の結果になるようです。近い将来の割引率の方が遠い将来の割引率よりも高くなる傾向を、行動経済学の用語で「双曲割引」といい、今を楽しむことにより高い価値を置く傾向が強いことを表しています。

経済学では従来、合理的な個人が完全情報の下で選択する状況を前提に議論がされることが多くありました。しかし、従来からの経済学が前提としていた合理的な経済主体が、実社会では必ずしも大多数を占めない可能性があるのです。また完全な情報が与えられることはむしろ稀であり、限定情報の下で思い込みに基づき行動することも多くあります。それらがしばしば、期待通りに経済活動が機能しない原因となるのです。

反面、こうした人間臭い思い入れが、世の中の進歩を促してきた面もあります。自分自身の経験を思い起こしても、他の人から評価される仕事は、基本的にコスト意識を度外視し、何か新しいことを達成・発見したいという動機から達成される場合が多かったように思われます。小手先の効率性からは、人を感動させるような成果は生まれないのです。

勿論、市場メカニズム自体は否定されるべきものではありません。効率的な資源配分の実現のために市場を正常に機能させる、またその実現に向けた制度設計・環境整備を進めることは、極めて重要な課題です。反面、現実社会では市場が失敗する場面は多くあります。市場メカニズムを最大限生かしつつ、併せ持つ限界を補完するために、市場外での「こだわりのある」活動が、社会のあらゆる場面で必要になってきます。例えばそれは、社会のあちこちで行われるボランティア活動であり、社会の進歩のために日々追求される研究開発であったりします。それらは全て、よりよい社会の実現に向けて自分の力を行使したいという、使命感に基づいて遂行されるものでもあるのです。

皆さんがこれから行っていく様々な選択は、決して完全情報の中で行われるものではありません。だからこそ、それを受容した上で、与えられた場で最善を尽くし、また時には短期的・表面的な効率性をわきに置き、使命感を持って「いい仕事」を追求していくことが重要だと思います。■